

日本語・日本語 教育を研究する

第18回

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究について情報をおとどけています。今回のテーマはポライトネス理論と対人コミュニケーション研究です。

ポライトネス理論と対人コミュニケーション研究

東京外国語大学外国語学部助教授 宇佐美まゆみ
(言語社会心理学、日本語教育学) うさみ まゆみ

1. 円滑な対人コミュニケーションに必要な言葉遣いとは？

対人コミュニケーション上重要な言葉遣いと聞いて、日本人が真っ先に思い浮かべるのは、「敬語」の使い方ではないでしょうか。しかし、日本語を学ぶ若者が、日本の若者に溶け込みたいと願って、最初にぶちあたるのは、「いかに敬語を使わないか」という問題だとも言われています。留学生が友達と話をしている際に、日本語の教科書で習った敬語をせっかく一生懸命使ってみたのに、「そんな言葉、友達同士では使わないよ」と言われてショックだったとか、自分の話し方が、仰々しい、よそよそしいという印象を与えてしまい、友達と、もう一歩踏み込んだ友好関係を築けなかったというような話もよく聞きます。しかし、そんな学生も、しばらく日本に滞在し、だんだん日本人の友達ができてくると、いわゆる「です・ます」抜きの話し方や、学生言葉、若者言葉を、少しは話せるようになってきます。そのおかげで、友達とも親交が深まったようです。学生の上達を喜ばしく思っていると、ある日、その学生が、「先生、一緒に飲みに行こうよ」と話しかけてくることになります。これら日本語を学ぶ学生たちの悩みや失敗談からも、日本語の難しさの本質は、「行く」が「いらっしゃる」「おいでになる」になるなどという敬語の豊富さ・複雑さにあるのではなく、相手や場面によっては、かえって敬語を使わないほうが、「心地よい人間関係」が築けるというような言葉の使い分けにあるということがよく分かるのではないのでしょうか。

2. 「ポライトネス (politeness)」とは、人間関係を円滑にするための言語ストラテジーである

これらの例のように、実際の言語使用における機能を重視した「ポライトネス理論」を提唱したのが、ブラウンとレビンソン (Brown and Levinson、1987) です。彼らは、従来の言語学者によって考えられてきた「丁寧さの原理」や、日本語における「敬語の研究」などは

全く異なり、「行く」「いらっしゃる」「お出でになる」或いは、“Can you ~?”、“Could you ~?”、“Would you mind ~?” というような言語形式の丁寧度を表す概念としてではなく、また、いわゆる「丁寧だ」とか「礼儀正しい」という概念でもない、実際の「言語使用場面」における「対人関係調節機能」、すなわち、「そういう話し方をされて心地よいかどうか」という「実際の人の気持ち」を重視した概念として「ポライトネス (politeness)」を捉え、「ポライトネスの普遍理論」を提唱しました。

「ポライトネス」は、簡潔には、「人間関係を円滑にするための言語ストラテジー」と定義され、冗談や仲間うちの言葉の使用なども含めてより広く捉えられており、日本語で言う「丁寧さ」とも、英語の一般的意味での “politeness” と同義ではありません。

3. 「ポライトネス」とは、人間の基本的欲求としての「フェイス (face)」を尊重する言語ストラテジーである

ブラウンとレビンソンのポライトネス理論は、「フェイス」という概念を鍵概念としています。すなわち、人間には、人と人とのかわり合いに関する「基本的欲求」として、「ポジティブ・フェイス (positive face)」と「ネガティブ・フェイス (negative face)」という二種類のフェイスがあると捉えます。ポジティブ・フェイスとは、他者に理解されたい、好かれたい、賞賛されたいという「プラス方向への欲求」であり、ネガティブ・フェイスは、賞賛されないまでも、少なくとも、他者に邪魔されたり、立ち入れたくないという「マイナス方向に関わる欲求」として捉えられます。ここで言う「ネガティブ」は、決して「否定的な」という意味ではありません。欲求の方向くらいに捉えておくのが妥当です。つまり他者に「近づきたい欲求」が、ポジティブ・フェイスで、他者と「距離を置きたい欲求、進入されたくない欲求」が、ネガティブ・フェイスです。

ブラウンとレビンソンは、この基本的欲求としての二つのフェイスを脅かさないように配慮することが、「ポライトネス」であると捉え、それぞれ、ポジティブ・フェ

イスに訴えかけるストラテジーを「ポジティブ・ポライトネス」、ネガティブ・フェイスを配慮するストラテジーを「ネガティブ・ポライトネス」と呼んだのです。ポジティブ・ポライトネスには、冗談を言うことや、仲間うちの言葉を用いることも含まれています。また、敬語がある言語においては、「敬語使用の原則」を守ることは、互いの社会的立場を侵害しないことを表すことから、全体として、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーになっていると捉えられています。

4. 「ポジティブ・ポライトネス」という概念が「ポライトネス」の普遍性を追究する道を大きく開いた

このポライトネスの捉え方が斬新であるのは、その場をなごませる冗談を言うことや、仲間意識を表すことになる仲間うちの言葉を用いることも、人間関係を円滑にするためのストラテジーとして効果的に機能しているという捉え方を前面に打ち出す「ポジティブ・ポライトネス」という概念を導入した点です。日本語では、通常、仲間うちの言葉は、言語形式の丁寧度は低くなり、決して従来の感覚で言う「丁寧な」話し方とは言えません。しかし、現実には、初対面の相手との会話など敬体（敬語）が中心の会話でも、心的距離を縮めたいときには、時折常体を交えて話すスピーチレベルシフトという現象が生じることなどが報告されており、くだけた表現が必ずしも失礼になるとは限りません。つまり、相手や場面を間違えれば、敬語を使っても慇懃無礼になるし、「ため口」も「ポジティブ・ポライトネス」になるというわけです。このように、言語形式の丁寧度は低くても、「ポジティブ・ポライトネス」になるという捉え方を前面に打ち出すことによって、敬語体系の有無などの各言語の構造的特徴を超えた、対人コミュニケーションの普遍原理として、「ポライトネス理論」を捉えていくことが可能になったのです。

5. ポライトネス理論から対人コミュニケーション論としてのポライトネスの談話理論へ

ポジティブ・ポライトネスという概念の導入によって、日本語で言う「丁寧さ」や「敬語使用」は、ポライトネスの一部ではあるが、すべてではないという捉え方が可能になり、また、日本語のような敬語体系を持つ言語と、英語のような敬語のない言語のポライトネスを、同じ枠組みで比較検討することが可能になったと言えます。ただし、そのためには、日本語のような敬語のある言語においては、ポライトネスは、敬語自体の体系とその変容を考慮に入れつつも、あくまでその運用の機能に焦点を当て、敬語以外の言語行動（あいづち、スピーチレベルのシフト操作、終助詞の使用、話題導入の頻度や割合、前置きの有無等々）と関連付けながら研究していく必要

があります。それは、おのずと、談話レベルの言語行動をその主な研究対象にしていくことを意味しています。文レベルのみでポライトネスを比べると、各々の言語構造の違いによる影響が反映されやすく、敬語のある言語とない言語のポライトネスを比較することが困難になるからです。

この談話レベルのポライトネスを体系的にまとめようとする「ポライトネスの談話理論」の構想（宇佐美、2001b）は、まだ始まったばかりです。しかし、円滑な人間関係を築くための談話行動の研究は、談話レベルの異文化間ミス・コミュニケーションの解決にもつながっていきます。そういう意味で、日本語教育とも密接にかかわっている重要な研究領域だと言えます。21世紀の日本語教育は、「談話レベルの言語運用を重視したコミュニケーション教育」の様相をますます強めていくことが予想されるからです。

ため:相手と同程度の地位であることをいう俗語。「ため口」

基本的な参考文献

ポライトネス理論の原典

Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. CUP.

(筆者注: やや高度な内容)

ポライトネス理論とその捉え方について、比較的分かりやすく解説してあるもの

Thomas, J. (1995). *Meaning in interaction: An introduction to pragmatics*. London; New York: Longman. (翻訳版(1998) 浅羽亮一監修、田中他訳『語用論入門』、研究社出版)

ポライトネス理論をいくつかの関連領域の観点から論じた特集 - ポライトネス理論理解のための簡単なキーワード集付き

『言語』(特集: 敬意はどこから来るか) 第30巻第12号(2001年11月号) 大修館書店.

日本語の言語使用とその変化の動向をポライトネス理論の観点から論じたもの

宇佐美まゆみ(2001a)「21世紀の社会と日本語 - ポライトネスのゆくえを中心に -」『言語』第30巻第1号(1月号特集「21世紀の日本語」) 20-28、大修館書店.

ポライトネス理論をポライトネスの談話理論へと発展させようとしたもの - ポライトネス理論研究の概観を含む宇佐美まゆみ(2001b)「談話のポライトネス - ポライトネスの談話理論構想 -」9-58. 『第7回国立国語研究所国際シンポジウム報告書 - 談話のポライトネス -』、国立国語研究所編、凡人社.